



生きる力を育てる研修旅行

— サラワク・スタディーツアーでの学び —

広島なぎさ高校
教諭 野中 春樹

はじめに

サラワク・スタディーツアーは、高校2年の研修旅行として、1998年から毎年実施されてきた。生徒たちはマレーシア・サラワク州(ボルネオ島)の熱帯雨林で暮らす先住民イバンの村を訪ね、彼らが共同生活するロングハウス(高床式長屋)にホームステイする。ツアーの期間は10日間だが、事前・事後学習を合わせると、学習期間は1年におよぶ。



命(生)を体感する

ロングハウスでは、森や畑、川から食料を得ている。生徒たちはその中でも特に、豚や鶏を自分たちの手で殺して食べることに大きな衝撃を受ける。



最初はこの行為を「残酷」に感じるが、その感情を見つめる過程で自分たちがそれまでずっと動物の肉を食べてきたこと、そ

して誰かが自分たちのために殺してれていたことに気づく。生徒はこの体験を通して「いのち」を発見する。自分たちがたくさんの「いのち」によって生かされていることに気づくことで、感謝の気持ちが心の底から湧き起こってくる。

食料を採る体験を通して、生徒たちは「生きる」ことを学ぶ。食べる、移動する、仕事する、家族で協力する……。こうした1つ1つを実感するようになる。

イバンの人たちが日常的に行っている営みの1つ1つが、生徒にとっては初めての体験ばかりだ。しかし、実はそうした営みこそが生きていくために必要であることに気づく。

日本では多くのことを学ぶが、生活するための基本的な営みについて学ぶのが難しくなっている。だから、生きる自信や実感がもてない。そんな生徒たちは、イバンの人たちを見て、「生きている」と感じる。そして、自分たちも「もっと生きたい」と思うようになるのである。

生き方が変わる

ツアーはこれまでの参加者の考え方、生き方、進路に大きな影響を与えてきた。

今年のツアーの参加者にこんな生徒がいた。「僕には人間嫌いなところがあった。人が素直に信じられなかった。この人の言っていることはどうせ嘘だろう、

どうせ裏があるんだろうと、疑ってかかっていた。この性格を変えたい、人間嫌いをなくしたいと思って、ツアーに参加した」ドキッとさせられる動機だった。ロングハウスの生活は、彼の考え方を根底から覆した。イバンの人たちはとても優しく生徒たちを迎え入れ、家族の1人として温かく包み込んでくれた。ロングハウスは彼にとって安心できる所になった。彼は、日本に戻ってから、「人の悪いところではなく、いいところを発見しよう、自分の偏見をなくそうとがんばっている」と語ってくれた。

生物関係の学科に行きたいと思っていた彼の進路も、「熱帯雨林の環境保全に関わる勉強をして働きたい」と大きく変わった。「自然と人間が共存関係にあることが分かった。自然は人間のよう自由に動くことができないし、考えることもできない。そんな自然を人間が保護すると、自然はそのお礼として人間に食べ物や、水、空気をくれる。このサイクルを繰り返すことで、自然は人間によって豊かになり、人間は自然によって豊かになる。もちろん、この逆も言える。人間がむやみに木々を伐採したり、動物を乱獲すると、自然は人にお礼をしない。今回のツアーで学んだことは、自然がくれるもののありがたさと、人間の行動の大切さだ。僕は人間として、自然をより良くするためのアクションを起こしたかった」と、語った。イバンでの生活に加え、酒井和枝さんから植林の活動を聞いたことも彼の考えに大きな影響を与えた。

酒井さんは35年前に単身でマレーシアに移住し、レストランや旅行社などを起業し、「ボルネオ熱帯雨林再生プロ

ジェクト」の代表として活躍している。彼は、アブラヤシ・プランテーションの開発をすると、熱帯雨林が再生しなくなることを知り、大変なショックを受けたようだ。さらに、困難の多い仕事を楽しく語る酒井さんに接して、「僕の進路がはっきりした」と言う。

ツアーに参加した多くの生徒たちが、自分のテーマを見つけ、学び、成長する姿を目の当たりしてきた。生徒の学びの豊かさにはいつも驚かされ、感動させられる。

つながりに気づく

生徒たちはイバンの人たちと心の触れあふ交流をする。森や川に囲まれたロングハウスの生活を体験することで、イバンの生活が自然の恵みによって支えられていることを実感する。

そして、アブラヤシ・プランテーションや合板工場を見学し、森や川の自然破壊の実態を知ることによって、開発やグローバルイノベーションがイバンの人たちの生活や環境に様々な問題を引き起こしていること、この状況と自分たち日本人の生活が繋がっていることに気づく。そしてイバンが直面する諸問題を自分たちの課題としてとらえるようになる。

行動する生き方を学ぶ

このツアーは学校とアジアボランティアセンター、地球市民共育塾、Society of Christian ServiceなどのNGOとの連携によって企画・実施されてきた。生徒はNGOのスタッフの「社会を変えたい、変えよう、変えられる」という思いに触れることで、社会の諸課題を解決



体験記を制作する高校生たち

昨年度の体験記

するために「自分にもできることがある、何かしたい」と思うようになる。さらに、「ツアーで学んだことをどのように伝えるの」というスタッフの問いが、生徒の行動を促す。スタッフは、現地での学びが具体的な行動に発展することを期待している。

この問いかけは教師にとっても大きな刺激となり、中学生に対する授業、文化祭での発表や体験記の制作などの発信型の学習活動を生み出してきた。そして、事後学習を「体験からの学びを伝える場」として位置づけるようになった。

体験を生きる力に変える

9年前のツアーの参加者の中に、「日本にロングハウスを持って帰りたい。自

然と共に生き、たくさんの人と協力して生きていくことを、日本に住んでいる人に伝えたい」と言った生徒がいた。現在、島根県隠岐郡海士町の教育委員会で集落支援員として働いている花房育美さんだ。彼女は、町民が自分たちの問題を発見し解決するためのサポーターとして活動している。島の高校生が企画運営する「ヒトツナギの旅」の支援も行っている。この花房さんが、本年度の「社会人講演会」の講師の一人として、高校1年生に海士町での仕事の体験を語る。

ツアーに参加した多くの卒業生が、サラワクでの体験を「生きる力」に変えているのを感じる。



中庭に敷いたブルーシートの上で車座になって授業をする